

子供の教育

— Childhood Education —
Journal of the Association
for Childhood Education

一月号（一九六八年）

この号には「子どもの成長、発達に関する知識」というテーマの巻頭文のほかに「成長速度における個体差」（ドロシー・エイコーン）「児童発達—昨今—」（ロイル・

マーフィー）の二論文が集められている。いずれも子どもに関する客観的知識が子どもの正しい理解や適切な処遇にいかん大切であるか。またそれが現在の教育行政にどのような形で現われているかを示しており、これらを通してアメリカにおける幼児教育が科学的研究成果を積極的に取り入れることがうかがえ、学ぶところが大きい。

巻頭文「子どもの成長、発達についての知識はどのような違いをもたらすか」でマリーランド大学のカイル助教授は次の四点を挙げている。第一に「子どもの成長、発達についての知識を持っている人はそれを持たない人より力の源を持っていることになる」例えば、不適応状態の自己について、その原因がわかれば自己に対する感情や理解が変わり、効果的に対処することができるであろう。

第二に、「子どもへの理解や感情を変えることができる」このことは、今まで困った行動のようにみえた子どもの行動も、そ

の原因がわかれば（例えば、子どもに満たしてやらなければならぬ基本的な愛情の要求や創造への要求があることについて知れば）その問題行動についての見方を変えて、適切に働きかけるようになるなどである。

第三に、「指導のための構成の仕方を変える」成長における個体差、性差、経験差等の発見から、子どもの学習の場をその成長の速度や興味に合った仕方で構成し、より効果的な指導を行なうようになって来た。多くの学校における個人差に応じた評価法の多様化、適切な学習習慣の形成のための幼小の時期の経験の影響力の発見にもとづく、恵まれない子どものための早期入学やヘッド・スタート・プログラムなどはその実践例である。

第四に、「われわれが共同で行なう仕事の仕方を変える」というのは、発達についての知識が広がるにつれて、個々の教育者はすべての問題に答えることができなくなり、子どもたちに最良の教育的経験を用意

するために、各々の専門領域間の交流が必要になって来た。そして、その共同作業を効果的に行なうためにはわれわれの対人関係に対する感受性を高める必要が生じて来たからである。

最後に筆者は知識の持つ影響力がそのように大きいことについて、われわれがそれを正しく用いることが一そう大切であり、単に部分的に子どもの行動や学習に統制を加えるだけでなく、尊重すべき一人間として子どもをとらえ、自己の力で伸びる潜在力を発展させる機会を見失わないようにしなければならぬと、知識を持つものの責任を説いているが、今後ますますわれわれが留意しなければならぬのは真にこの点であろう。

第二の論文は巻頭文の第三点に関連することで、生理的、身体的発育速度の差異、特に男女差、世代差についての資料を重視し、個人差に応じた指導を強調している。すなわち、思春期にある子どもたちの成熟

差は同年齢内で約六年に及び、それらの差異は彼らの自己概念や集団への適応、特に人気やリーダーシップ、両親との関係等と深い関係をもち、早熟の女子と晩熟の男子に適応問題が強まりやすいことから、特別な配慮の必要性を強調している。

幼児については、それほど大きな差異はみられないにしても、体格、能力、興味にかなりの広がりがあることが認められることから、柔軟性のある計画が大切で、特に年齢不相応に大きかったり、小さかったりする子どもに対する周囲の評価やそれにもとづく誤った期待が子どもに及ぼす影響について考えなければならぬと、現代における成長の加速現象、個人差の増大および、社会的評価を媒介としたそれらの心理的側面への影響の大きさに注目している。

第三の発達心理学の発展とその寄与に関する論文は、発達についての理論的発展と教育的実践について、一九二〇年代から五〇年代にかけての研究を通して、現時点で

のわれわれの実践への示唆を与えている。

過去における、マーガレット・ミード、ゲゼル、エリクソン、ピアジェなどの業績は大きなものであるが、それらは主として中流階級の被験者にもとづく理論であること、認知的発達における初期経験の役割については着目されなかったこと、発達における特定要因のみが強調される傾向にあったことが指摘され、筆者は最近の研究にもとづいて、発達における諸側面の相互関連性と発達を促す物理的、心理的刺激の役割を強調して、次のような正常な発達に関する仮説をあげている。

- (1) 正常な認知的、運動的、動因——情動的発達は相互に関連している。
- (2) これらの発達は(植物、動物と同じように)適切な気候、風土に依存している。
- (3) 適切な精神的、身体的な栄養がないと認知的発達に障害が起こる。
- (4) 安定した母子関係の適当な持続がないと社会的発達に支障をきたす。そして、こ

これらの発達を支える諸要因は、実は低所得階層の子どもたちにおいて失われやすいことから、さらに、彼らのための教育の原理が次のように導かれている。

(1)適切なマザーリングを受けられなかった子どもには、それを回復するような支持的取扱いが第一である。

(2)歌、リズム、ゲーム、絵画、その他さまざまな方法によって環境への活発な反応を促す。

(3)好ましい習慣形成を通して、ものの構造、秩序、構成などの内面化をはかる。

(4)言語能力、数能力などの特殊な欠陥を診断する。

(5)子どもの精力を建設的な方向にむけることを通して抑制力を発達させる。

このようなよい発達のためには、恵まれていない特別な環境にある子どものための教育的原理は、普通児の指導に当たっても十分参考になろう。

以上三編の論文を通して、人間開発に社

会がその責任を果たそうとするアメリカ社会の動向の一端がうかがえると共に、今後一そう個々の特性や、そのおかれた状況、過去の経験などに合わせた効果的な教育のための研究及び実践の必要を感じさせられるものである。(S)

二月号(一九六八年)

この号のプリンスストン大学教授メルヴィン・タミンによる巻頭文「アメリカにおける教育法」はアメリカ教育界の今後の方向について述べたものである。わが国の教育状況と共通の問題を含んでいるところから、われわれに教育における評価、教育課程、教師像について根底から考えなおし、真の教育のあり方について反省するためのよい資料を与えてくれている。その内容を少し詳しく紹介してみよう。

筆者によればアメリカの学校は今、学生、カリキュラム、教師について抜本的な再評価の必要に迫られているという。すなわ

ち、ある学校や学生の相対的な成功(現在とられている評価の方法)というものはそれより多くの学校や学生の不成功を土台としており、確実な教育という点からみれば適切さのおぼつかない入試のもとの現在のいわゆる有名校に効果的教育を求めることの危ぶまれる状態である。そこで、現状を正しく診断し、対処するための基準として次の四点を挙げて論議が進められている。

一、学校は子どもたちのため、彼らの発達、成長、喜びのためにあるものである。

二、子どもの発達は生徒と先生の相互作用の中で、カリキュラムと呼ばれる種々の材料や経験の周辺で行なわれる。教育の成功と失敗はこの相互作用の子どもの中に生じたものによって測られるべきである。

三、もし期待した発達が子どもの中にはられなければ、欠陥は子どもの中にではなく組織の構造の中に求められねばならない。

四、すべての子どもは全く等しく学校の恩恵や賞を受ける権利を持っている。

これらの観点に立てば、主として合格、不合格を決めるドリルや試験を通して教育が行なわれるということは根本的に誤っているといえる。合格、不合格といってもそれは一体何に対してなのか？ たえば、一学年を終了して二学年に進級できるしるしであるとしても、それは意味のないことである。なぜなら本来すべての子どもが学齢期間に最良の発達を遂げるよう配慮することが大切なのであるから、合格か不合格かということは子どもについてではなく、むしろ教育制度やその執行者について問われるべきである。

この考え方が取り入れられるならば、子どもたちは失敗の恐れから解放され、その能力と興味に応じた学校を楽しむであろうし、教師もまた不確かな試験をしたり、意味もない成績をつける必要がなくなる。教師の適性が何人の子どもを優等生名簿に入

れたかということではなしに、各々の子ども我的生活にどのような変化をもたらすことができたかということで評価されるとするならば、それは教師としての自尊心にも関係してくるであろう。もちろん問題がないわけではない。もし試験、カリキュラム、免状、賞などがなければ基準についてどうなるのか？ しかし、基準(スタンダード)と規範(ノルマ)とは大変違ったもので、

最高の規準というものはグループ内の個人差がいかに大きくとも、達成可能な最高水準を指すことであるが、現在の競争的状况の下ではむしろ規範すなわち実際に達成された平均値などにもとづいている。とするならば、自動的に五〇％はノルマ以下、不成功に終るような制度のもとで、一体どのような教育的指針が考えられるであろうか。

カリキュラムも一つの問題点であるが、これも生徒への効果という点からとらえられなければならない。カリキュラムの選択

に当たって、われわれは子どもたちにどうなってほしいか、例えば、何を価値づけし、何を五感で感じとり、何に喜びを得、何を自己や自然や人間について学んでほしいか、他人に対してどのように振舞い、何に熱中し、そしてどんな技能を身につけてほしいと考えるかということが問われなければならない。

これらの点から出発した時はじめて教師や生徒のあり方、教材や経験の問題へと進めることができるのである。

さらに、教育作用の第三の成分である教師についてみると、そこには一般に名目上の一致と実質的不一致、すなわち、最良の教師が必要であるという一致と、何が良い教師であるかという不一致がみられる現状である。筆者はそこで、教育効果を最大にするための教師の訓練の要素が四つあると説く。

一、教師はどのような潜在力をもった子どもであれ、すべての子どもの発達、成長

の価値が等しいことが確信できるようになる。

二、科目に沿ってではなく、子どもの中に育てたいと考える理解や価値観や行為に即しての指導法についてのすべてを学習する。

三、子どもの遂行を最も効果的に行なわせるような、個人差、学校差、地域差に応じた種々のカリキュラムの目標に対する適切な経験と教材の可能な範囲を確実に把握する。

四、教師の成長には時間、精力、興味が必要である。教師は自己の成長のため絶えず投資を行なっていなければ、専門的地位を要求する権利はないし、学校側も教師の専門的進歩のために時間や援助や設備を与えなければ教師に対して専門的行為を期待する権利はない。

以上のような考えは一見実現不可能なようにみえるが、この考え方は全く新奇な

のではなく、むしろ本来的なものである。

実際には教師や学校経営者よりも自分の子どもの特権が奪われると考える父兄の抵抗もあるし、教育の革新を妨げる保守的な動きの数々があることも事実である。しかしながら、一部ではすでに、評価を行なわないう学校、教師によるカリキュラム委員会、合・不合のない継続カリキュラム、目標に合わせた異質集団による教育の実験などの形で革新が進められてもいるのである。

最後に、筆者はこれらの問題は、幼児教育から大学教育に至るまでの共通の問題であることを指摘し、教育革新に対しての連邦政府の財政的援助を期待し、この教育の再構成がアメリカ自身の再構成につながるものであると結んでいる。わが国におけるテスト中心主義、有名校への集中と試験地獄を想う時、われわれは筆者の説くところを深く考えねばならないのではないだろうか。

(O)

幼児の教育 第六十七巻 第十一号

十一月号 © 定価八〇円

昭和四十三年十月二十五日 印刷
昭和四十三年十一月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします